

# ハーレム・ルネサンス小説 (10)

George Schuyler

岸本 寿雄

## 1

George Schuyler (1895-1977) は、Rhode Island の Providence に生まれたが、主にニューヨークの Syracuse で育っている。 *Negro Digest* によれば、Schuyler という姓は、独立戦争以前からニューヨークの Albany 地域では、最も古い黒人の姓であるらしい。高校卒業後、17才でアメリカ陸軍に入隊、有名な黒人25連隊の一員となり、8年間そこに在籍している。その事から、彼の文筆活動の基礎は、推測ながら軍隊の雑誌 *Service* にあると思われる。

シラキュースで肉体労働に数年従事し、数ヶ月放浪した後、1923年から1928年の間、Philip Randolph, Chandler Owenと共に、黒人の社会主義雑誌 *The Messenger* で働き、24年からは *The Pittsburgh Courier* に関わった。1937年から1944年にかけて、*The Crisis* 誌のビジネスマネージャー、1944年から1964年の間、*Courier* 誌の special correspondent として、南アフリカ、西インド諸島、フランス領の西アフリカ、ドミニカ共和国へ取材旅行をしている。 *National News* のエディター、 *New York Evening Post* の correspondent にもなっている。その間1928年にはテキサスのパイオニア的牧場や銀行の経営者の娘でバレダンサー兼芸術家の Josephine と結婚し、一児をもうけている。ピアニストであるその娘 Philippa は、1969年に不幸にもベトナムにて飛行機の衝突事故で他界している。

文筆家としてのスカイラーは、1926年、*Nation*誌に彼の論文 "The Negro-Art Hokum" が掲載されて以来、メンケンの弟子と自認し、"Black Menken" と呼ばれるようになった。1931年に、小説*Black No More*、同年*Slave Today*、かなり間が空くが1966年に、自伝*Black and Conservative*を出版している。スカイラーの死後1991年、Robert A. Hill等によりスカイラーの書いたものが*Black Empire*として出版されている。その編集者の一人John A. Williamsは、その序の中でスカイラーの言葉として "done everything and anything a man could do" と紹介している。<sup>1</sup>

## 2

*Black No More* (1931) — フランスの旧15歩兵連隊に所属したことのある黒人Max Disherと彼の友達Bunny Brownは、ハーレムのHonky Tonk Clubに出掛ける。そこでジョージアのアトランタ出身であると思われる白人の女性に心を引かれ、ダンスを申し込むが拒否される。3年前まで貧乏医者であったDr. Junius Crookmanは、スポンサーを得て3年間ドイツで研究の結果、黒人を白人に変える治療法を開発する。クルークマンは、黒人を白人に変えることで、人種問題が解決すると信じている。その話を聞いたマックスは、クルークマン博士のアメリカ治療第一号となる。その治療の体験を女性リポーターに売ったことから、マックスは大金を手に入れる。だが、白人になってみると白人と運命を共にすることに不安を抱くようになるが、意を決してハーレムで会った白人の女性を探すため、アトランタに向かう。

黒人が白人になれるブームで、ハーレムにあるバーニーが勤めているダグラス銀行では、預金を引き出す人が多く、銀行は危機に陥る。ハーレムでは、白人となり、そこを引越す人が多く、"For Rent" の張り紙が目につき、クルークマンの医療行為に反対する運動が起きる。これまでkinky hairを、直毛にする仕事は金になったが、直毛にする黒人も激減する。この仕事で金持ちになったMadame Sisseretta Blandishは、American Race Pride Leagueの副会長と

Social Equality Leagueのニューヨーク支部の支部長を兼任しているが、両団体は会員激減と寄付金激減により、財政的に厳しい状態となる。

マックスは、名前をMatthew Fisherと変え、人類学者であると偽り、白人優越主義を唱えるThe Nights of Nordicaに加わる。この組織で、マックスはクルークマン博士のBlack-No-More運動が、白人の脅威と成る事を強く訴え、そのGrand Exalted Giramに選ばれ、名声を高める。Black-No-More運動は、南部に広がり、黒人音楽、黒人独特の笑いさえ消えて行く。全国社会平等連盟に寄付金が無くなり、その機関紙*Dilemma*も経営困難となる。その団体の主たる役員、Dr. Shakespeare Agamemnon Beard氏、Walter William氏、Dunbar UniversityのRev. Herbert Gromeも、その状況に困惑し、更にThe Negro Date Leagueの元会長Joseph Bonds氏、アフリカ帰れ運動を提唱しているStantop Licorice氏にも、大きな影響を与える。

Black-No-More運動に反対する「白人の騎士団」の組織は拡大し、その機関紙*The Warning*の購読者は増大し、寄付金は多くなり、マックスことマシューの名声も上がる。彼は、この組織の帝国大魔人の地位に在るHenry Givensの娘Helenと結婚する事となる。Helenこそ、彼がハーレムで出会った女性であった。更に親友のバーニーも白人となり、マシューの組織に加わる。ところが、その頃から金持ちの白人の女性に黒人の子供が生まれたというニュースが報道される。

マシューの組織はあらゆる所に金を撒き、ジョセフ・ボンズ氏、今や白人となったスタントップ・リコリス氏も、金を受け取り、その組織に協力する。他方Black-No-More運動の治療所も拡大し、全国100箇所、24時間営業となる。開業二年後には、刑務所、孤児院、精神病院以外殆どの場所で治療が行われ、北部ではミュラトーだけがそのままで、南部のミシシッピ州でも黒人は珍しい存在となる。先見のある人の、「人種問題は無くなるが、白人の間で労働競争が激しくなり、社会主義に向かう」との警告は、政治家、企業経営者に脅威を与える。

「白人の騎士団」は、ラジオ番組を買取、Black-No-More運動を弾劾する。その結果、ホワイトハウスでも問題となり、ついにBlack-No-Moreのサナトリ

ュームに調査が入るが、法的に問題は無く、調査の別の結果として、アメリカには黒人が100万人しかいない事が判明する。

「白人の騎士団」のギブンス氏は、もう一つの白人優越団体の会長 Arthur Snobbraft氏と協力して、民主党から大統領に立候補する事となる。民主党は猛烈な勢いで共和党を追い越す所まで勢力を拡大する。民主党の「白人の騎士団」の下で研究しているDr. Buggerie氏の配下に、ベアード博士が加わり、共和党を追い落とす最後の研究をしている。その研究は、その国の家系に付いてである。2000万人を調査した結果、下層階級の殆どの人に黒人の血が流れ、人口の半分以上が5世代以前の記録がない事、副大統領候補のスノブクラフト氏にも黒人奴隷の血が入り、ギブンス氏や多くの上院議員にも黒人の血が流れている事が判明する。マシューの家系に関する記録は無く、「白人になった黒人」との疑惑が浮上する。さらに悪いことには、データーの最終報告書が盗まれ、ヘレンには黒人の子供が生まれる。

投票日の前日、ヘンリー・ギブンス一家は、自家用飛行機で逃走する。別の研究では、人工白人よりも自然白人の方が色が少し黒いことが判明し、新たな混乱を生む。日光浴をして皮膚を黒くし、人々は色の黒さを競うようになる。

### 3

H. L. Menken<sup>2</sup>の弟子と自称するだけあって、スカイラーの毒舌、風刺は鋭い。この意味で、*Black No More*における彼の風刺は冴えている。黒人が白人になるBlack-No-More運動は、黒人問題としては興味のある題材で、副題を *Being an Account of the Strange and Wonderful Working of Science in the Land of the Free, A.D. 1933-1940* とし、そこにもまた皮肉が漂っている。

皮膚が白くなる、さらには白人となるという事は、黒人の願望であり、多くのpassing小説に見られるように、黒人の究極の願いである。だが、白人になった主人公マックスの心は揺れ動く。

For a minute or so, Max stood irresolutely in the midst of the gibbering crowd of people. Unaccountably he felt at home here among these black folk. Their jest, scraps of conversation and lusty laughter all seemed like heavenly music .... But then, he suddenly realized with just a tiny trace of remorse that the past was forever gone. He must seek other pastures, other pursuits, other playmates, other loves. He was white now.<sup>3</sup>

初期の段階では、肉体的変化、例えば、黒人特有の頭髪 kinky hair、所謂 Negro lips も白人化するが、だが、心的問題は引用のように残されるように思える。しかし、スカイラーはこの問題もいとも簡単に克服してしまう。科学的読み物としてではなく、G.オーウェルの *Animal Farm* 的で、そこがこの小説の面白さでもある。心的問題を解決した主人公は、K.K.K.団を仮想した「白人の騎士団」の主要メンバーとなり、その組織のメンバーの前で、典型的白人優越主義者として、次ぎの様に語ります。

.... that a white skin was a sure indication of the possession of superior intellectual and moral qualities; that all Negroes were inferior to them; that God had intended for the United States to be a white man's country and that with His help they could keep it so; that their sons and brothers might inadvertently marry Negroesses or, worse, their sisters and daughters might marry Negroes, if Black-No-More, Incorporated, was permitted to continue its dangerous activities.<sup>4</sup>

自らが過去に受けてきた事、現在自分が白人となつて行なっている事を背景に、白人の優越性、黒人の劣等性、Black-No-Moreの治療によって、白人の優越性が汚染される事を訴えるからこそ説得力があり、マックス改めマシューはその団

体の Top two にまで昇進する。妻のヘレンが黒人の子供を出産した時、ヘンリー・ギブンス家に黒人の血が流れていたにもかかわらず、マシューは妻ヘレンを慰めるために、いとも簡単に "You're not responsible for the color of our baby, my dear. I'm the guilty one."<sup>5</sup> と告白する。

最後のどんでん返しは、この国の人々の家系に関する報告書が盗まれ、ギブンス一家とマシューはメキシコへ逃亡し、さらに新白人に関する調査で "... from two to three shades lighter than the old Caucasians, and that approximately one-sixth of the population were in the first group."<sup>6</sup> との発表がクルークマン博士によってなされる事である。このように、この小説が社会風刺になっている事は興味深い。

既に、気付いている人もあろうが、命名にも工夫が凝らされている。例えば、Dr. Crookman の Crook, Snobbcraft 氏の Snob, その意味はさて置くとして、スカイラーの風刺の刃は、次ぎから次ぎへと人を襲う。当時の黒人の主要人物総なめと言う感がする。

黒人の毛を伸ばす仕事で成功し、社会のリーダーである Madame Sisseretta Blandish は、A'Leria Walker<sup>7</sup> の事で、黒人 (Black) で大きく成功 (Grandish) の意味が込められ、Dr. Shakespeare Agamemnon Beard は、W. E. B. DuBois の事で、黒人のリーダー格をトロイ戦争の総指揮官アガメムノンに置き換え、髭を生やし威厳を持っている事から Beard と命名され、Dr. Napoleon Willington Jackson は、James Weldon Johnson で NAACP を喜んで (?) 率いるから Willing, Williams とを調合し、Johnson を Jackson に変え、策士の要素からナポレオンを付されたのであろう。Walter William は W.W. の語感からリンチの調査をした Walter White, 元 Negro Date League の Dr. Joseph Bonds 氏 (筆者には確信がないが、多分 Charles S. Johnson のことであろう), Santop Licorice は、Murcus Garvey である。これらの内二人は白人になり、K.K.K. 団と思われる「白人の騎士団」の協力者となり、一時的に Dr. Beard 氏も、その団体の支配下にいる。風刺はウイットとヒューモアを持ち、攻撃の対象を持つが、スカイラーの場合、切れ味は鋭く、面白いものの、結局返す刀ですべてを切り尽くし、何も

残らない所に、不安がある。

H. L. メンケンの弟子を自認するスカイラーの思想を理解するには、当時彼が担当したコラム検討する必要がある。1926年6月号の *Nation* 誌の "The Negro-Art Hokum" と題するエッセイの中で、 "... the Aframerican is merely a lampblack Anglo-Saxon, .... It is sheer nonsense to talk about 'racial differences' as between the American black man and the American white man ...."<sup>8</sup> と、彼の本質をちらつかせている。この観点に立つと、クロード・マッケイ、ロシアのプーシキン、デュマ、ポール・ローレンス・ダンバー、チャールス・チェスナット、ジェームス・ウエルダン・ジョンソンに至るすべての黒人もアメリカ人も "yet their work shows the impress of nationality rather than race,"<sup>9</sup> となる。この論法は人種的相違を無くし、遂にはスカイラーの主張する Nationality の存在すら危うくする。 *Black No More* の背景にもこの考え方があがるが、彼の風刺もそのためにその陰が薄くなっている。

Margaret Perry は、彼女の著書 *Silence to the Drums* において、次ぎのように述べている。

This defect weakens the important underlying thesis of the novel, i.e., the absurdity of color prejudice. Whereas the author fails in satire, he succeeds in comedy, although it may appear to be low and broad. Subtly, however, in not Mr. Schuyler's avowed purpose.<sup>10</sup>

ペリー女史も、「人種偏見の不合理」のためにテーマが弱まり、コメディになっていることを指摘している。Robert A. Bone は、スカイラーの同化主義は、黒人ナショナリズムを攻撃することにより、黒人問題の存在と現実から目を背けるものとして次ぎの様に評している。

George Schuyler's writings provide, in fact, a classic study in

assimilationism. In one of his early columns he vehemently attacks "the lie that Negroes wish to be white"; yet he based *Black No More* on this very conception. His attacks on Negro nationalism, whether of the Garvey or DuBois variety, run true to form. So, too, does his growing alienation from the realities of race. In his early days Schuyler was content to deny the existence of a distinctive Negro arts; today he does not shrink from denying the existence of a Negro problem!<sup>11</sup>

#### 4

*Slave Today: A Story of Liberia* (1931) — Takama村に住むGala族の若者Zoは、村長Bongomaの娘Pametaと結婚する事となる。祈祷師のOld Taloは、結婚式はうまく行くが、その後に何かが起こる不安を予言します。案の定、ジョンソン大統領に新しく第一地区長官に任命されたDavid Johnsonが、兵隊を連れてその村を訪れ、酒、食事、宿泊を強要する。年貢が遅れていた事から、25ポンドの制裁金と村長を鞭打ちの刑に処します。村長としての威厳を傷つけられたボンゴマは、頭を下げながらも長官に抵抗した事から殺され、結婚したばかりのパメタも妻にするために奪い取られます。その行為に怒ったゾーは、彼女を取り戻そうと首都モンロビアにある長官の邸宅に忍び込むが、捕縛され、鞭打たれ、リベリアからかなり離れたスペインの植民地Fernand Po島へ、契約奴隷として売り飛ばされる。

フェルナンド・ポー島で、ゾーは奴隷状態で働かされるが、パメタを助けるため金を貯める。親友のSokiの忠告にもかかわらず、自分を奴隷状態から解放する事を口実に、現地の産物を運ぶ運転手にブドウ酒を与え、ついでに女を買う。その女に秘密を打ち明け協力を依頼する。計画が成功する直前、その女も運転手もグルで、結局ゾーは逮捕される。逮捕されたゾーは苦役を強いられ、遂にマラリアに罹り生死をさ迷う。

二年が過ぎ、隷属状態から解放され、モンロビアに到着するが、またも逮捕され、大切な所持金7ポンドも罰金として取り上げられる。最悪の事態を免れたゾーは、故郷のタカマに向かう途中で、今や公共事業長官に任命されたジョンソンの行なう自動車道路作りに従事する配下に捕まり、無償労働を強要される。隙を見て森に逃げこみ、タカマに急ぐ。途中病気で死にかけている自分の妻パメタに再会する。彼女は自分がこんな身体になったのは長官の所為であると訴えながら、ゾーの腕のなかでこの世を去る。復讐に燃えるゾーは、ジョンソン長官の居場所を見つけ、忍び込み長官を草刈ナイフで殺害するが、彼もまた警護兵の銃弾を受け、この世を去る。自由党のTom Saunders、検事総長のRufus Hendersonの努力にもかかわらず、保守党のジョンソン大統領は、投票の妨害、投票箱のすり替えにより、大統領に再選される。

## 5

この小説は、スカイラー流にタイトル*Slave Today*が、アイロニーとなり、*Black No More*に見られた風刺は、影を潜めている。そのためにプロットに集中できる事は、ある意味では、前進と言えよう。この小説の誕生の経緯は、当時リベリア<sup>12</sup>に、奴隷制が現存することを知ったNational Urban LeagueのCharles S. Johnsonが、スカイラーに調査を依頼、その報告書として出版された事にある。小説の序において、スカイラーは、ゾー、ソキ、パメタ、村長ボンゴマ等は、実在した人物をモデルにしたと明言し、リベリアの奴隷制について次ぎの様に語っている。

In Liberia this modern servitude is strikingly ironic because this black republic was founded by freed Negro slaves from the United States a century ago as haven for all oppressed black people. Its proud motto reads, "The Love of Liberty Brought Us Here, " but the aborigines find little liberty under their Negro masters.<sup>13</sup>

虐げられたアメリカ黒人が、新たな奴隷制度を作った事は、アメリカの二重の犯罪であろう。この小説の主人公と思われるゾーもパメタも、小説の最終部分で、姿を消し、小説として飾り物のようにも思える。途中ゾーの農村支持派とソキの都会支持派の興味ある論議が展開されるものの、この小説では活かされていない。スカイラーは事実を尊重するあまり、ゾーとパメタのクライマックスと、カタルシスを完全に潰している。強いて述べるなら、タイトルの奴隷制こそ、その主人公と言えよう。

Arthur P. Davisは、彼の著書*From the Dark Tower*において、次ぎの様に述べている。

*Slave Today* is not a good novel. Schuyler really does not possess the mind-set necessary to write a good work of fiction, particularly one that deals, as this volume does, with romantic love. Schuyler has a good journalist's mind, a satirist's mind, but his mind is too analytical and logical to do justice to the tragic love story he attempts in *Slave Today*. As a result, what should be the soul-searching experiences of Zo and Pameta, his principal characters, simply do not move us, for they and the other protagonists do not come fully alive. They are puppets the author manipulates to describe the horrible condition in Liberia in 1931.<sup>14</sup>

デイヴィスは、スカイラーのジャーナリストとしての知性、風刺家としての知性を賞賛しながらも、「良い小説を書くために必要な心の準備の欠如」、具体的にはジャーナリストの「論理性」と「分析力」が、*Slave Today*の障害になっていることを指摘している。更にデイヴィスは、"one of the nation's most conservative writers, black or white, and one of the most unrelenting enemies of the

so-called Communist conspiracy"<sup>15</sup>とも評している。その評の原因は何処にあるのだろうか。

スカイラーの文筆家としての出発は、社会主義的運動家であり、学者でもあるC. S. ジョンソンに見出され、その機関紙『メッセンジャー』の編集に携わる事からである。*Black No More*のタイトル、*Slave Today*の奴隷制批判に左翼的傾向が伺える。だが、*Black No More*では、NAACPもUrban Leagueも、またそれに関わる人々も彼独特の風刺で葬り去ったために、ボーンも指摘したように、スカイラーの同化主義的側面が顕著となっている。彼の鋭い分析力と論理性は、自ら立つ側にも向けられ、自分の立つ組織、関わる人間、論拠、それらを彼の鋭い風刺により破壊する。結局、彼の向かう所はその逆方向にならざるを得ない。

次に問題となるのはNancy Cunardの*Negro* (1934)の中での、Eugene Gordonの "an opportunist of the most odious sort" との発言である。ゴードンはフロリダに生まれ、Howard, Boston大学で学んだ後、1919年から*Boston Post*の社説担当、後に『オポチュニティー』、*The American Mercury*に寄稿した人であり、スカイラーと同じ分野、時には同じ機関誌に関わっている。良く知っている人物の発言として、顧慮に入れておかなければならないであろう。一つの例証として、1926年のCarl Van Vechtenの小説*Nigger Heaven*がもたらした、黒人間の大論争が挙げられよう。この間の詳しい状況、論争は拙著*Carl Van Vechten: The Man and his Role in the Harlem Renaissance* (1983, 成美堂)<sup>16</sup>で論述しているので詳細は省くが、この秋から、翌年にかけてバン・ベクテンを支持するJ. W. Johnsonを中心とする所謂ハーレム派と反対のデュボイスを中心とするグループに分かれて論争が展開された。バン・ベクテンは、スカイラーとの関係から、自分の支持派と考えていた。ハーレムルネサンス後、1950年にスカイラーが "The Van Vechten Revolution"<sup>17</sup>を、書いた時、当にその関係と支持派の態度を明確にしている。だが、1926年11月4日は、異なった態度で『ニガー・ヘブン』に反対する論説を行なった。拙論ではスカイラーのその態度の微妙さを指摘しておいたが、ゴードンの指摘は、スカイラーの本質の一部を指摘しているものと言えよう。好意的に考えるなら、あの日の会場の異常な雰囲気と、

彼の性格から、opportunistにならざるを得なかったかのかもしれない。

スカイラーは、*Slave Today*の最後の所で、再選された大統領が、ゾーに殺されたジョンソン長官に対して、最大に皮肉を込めて、"'And what's more important,' mused the President, half aloud, 'he isn't burdened with scruples.'"<sup>18</sup>と語らせている。*Nigger Heaven*論争での、彼の態度を、スカイラーは "'What's more important,' mused himself, half aloud, 'I must catch the mind of audience with shafts and Darts.'"<sup>19</sup>と言いたげである。いずれにしても、スカイラーは、ハーレム・ルネサンスの中で、独特な形で存在した事は確かである。

## NOTES

1. *Black Empire*, Northeastern University Press, 1991, Boston p. ix.
2. H. L. Menken (1880-1956), アメリカの批評家で、ルネサンス当時、George Jean Nathanと共に雑誌*Smart Set*を編集、24年には*American Mercury*を創刊した。Dreiser, S. Anderson, E. G. O'Neillを弁護し、1920年代の若者に影響を与えた。特に巧妙な風刺、悪を憎む正義感、健康的な楽天主義で、一時は評価が落ちたが、現在その評価が見直されている。当時新設のAlfred A. Knopf社をCarl Van Vechten, Joseph Hergesheimer (1880-1954, 小説家)と共に支える看板作家・批評家であった。
3. *Black No More*, Negro Universities Press, New York, 1969, p.35.
4. Ibid., pp.74-75.
5. Ibid., p.213.
6. Ibid., p.245.
7. A'Leia Walker (1885-1931) は、アメリカ最初の黒人億万長者の娘で、母Sarah Breedlove Walker (Madame C. J.)の後を継いだ。Madame C. J.は、黒人の縮れ毛を真直ぐに伸ばす事で、巨万の富を築いた。A'leia Walkerは、ルネサンスの中では最も華華しい人物で、パイプオルガン、プール、白い髪を被った召使達がいる、Irvington-on-Hudsonに大きな邸宅を持っていた。更に136丁目には手の込んだライム石のマンション、ハーレムのEdgecombe Avenueには、アパートがあり、ハーレムルネサンス期には、幾度と無く大きなパーティーが開かれ、多くの黒人の画家、作家・詩人、ミュージシャン、俳優、ならず者、時には王族すら訪れ*Dark Tower*と呼ばれた。彼女の様子はバン・ベクテンの*Nigger Heaven*にも描か

れ、Hughesは彼の自伝*The Big Sea*で、パーティーの様子、葬式の模様と言及している。特に彼女は、パーティーを通して黒人作家、詩人、画家、ミュージシャン等を色々な人物に紹介する事により、ルネサンスの側面的働きをしている。

8. *The Nation*, Vol.122, No.31, June 16, 1926, pp. 662-3.
9. *Ibid.*, p.663.
10. Margaret Perry, *Silence to the Drums*, Greenwood Press, Westport, Conn., 1976, p.100.
11. Robert A. Bone, *Negro Novel in America*, Yale University Press, New Haven, 1970, p.91.
12. Liberia, この語源は、自由Libertyであり、現地ではライベリアと発音されている。1822年アメリカの奴隷を解放された黒人の一部が、アメリカ植民地協会の援助を得てアフリカに帰り、建国した。1847年にJoseph J. Robertsを初代大統領に選び、アフリカに最初の共和国を樹立した。面積は九州と北海道を合わせたぐらいで、人口約250万人。その内の約5%が、アメリコリベリア人で、政治・経済・教育を支配し、土着民との格差、差別がある。
13. Schuyler, *Slave Today*, McGrath Publishing Company, Maryland, 1969, p.5.
14. Arthur P. Davis, *From the Dark Tower*, Howard University Press, Washington D. C. 1982, pp.106-7.
15. *Ibid.*, p.104.
16. Hisao Kishimoto, *Carl Van Vechten; The Man and his Role in the Harlem Renaissance*, Seibido, Tokyo, 1983, pp.59-93.
17. Schuyler, "The Van Vechten Revolution," *Phylon: Atlanta University Review of Race and Culture* (Fourth Quarter, 1950), p.366.
18. *Slave Today*, op.cit., p.290.
19. *Italic is Mine*. "Shafts and Darts" は、*The Messenger* 誌のスカイラー流のコラムで、彼の風刺の鋭さから、そのような名前が付けられている。